

建築家・前川國男の「エスプラナード」の形成過程に関する一考察

A study on the formation process of “Esplanade” by Maekawa Kunio

○今野政憲¹, 大川三雄²*Masanori Konno¹, Mitsuo Ohkawa²

Abstract: This study examines the formation process of “Esplanade” by architect Kunio Maekawa, analysis through his architectural works. “Esplanade” is stated for the first time is 1966, Saitama Lyceum. After, it came to be used in many public architectural works and he was adopted as a technique. And then, “Esplanade” has a basic from of the Le Corbusier “Architectural Promenade”. But “Esplanade” is the retention square by making a continuous space horizontally basis. Maekawa as philosophy, eliminates the time axis from architectural works, Maekawa tried to the purpose of humanity reconstruction for citizen, and he reflect architecture.

1. はじめに

前川國男の建築作品には「エスプラナード」或いは「憩いの広場」と呼ばれる外部空間が存在する。前川が明確に「エスプラナード」と記述した作品は「埼玉会館（1966年）」からであるが、以降、公共建築（美術館・市庁舎）を中心として、前川が多くの建築作品で採用した手法である。前川に関する既往研究として、松隈洋による一連の研究や宮内嘉久による前川との対談集があるが、コンペ作品の分析や設計手法の考察が中心で、「エスプラナード」に関する研究は見当たらない。本稿では前川の「エスプラナード」に関連する言説と作品の分析を通し、その形成過程を考察することを目的とする。

2. 前川の言論にみる「エスプラナード」の萌芽

・師・コルビュジエから学んだ中庭に対するイメージ

前川國男は「エスプラナード」の空間を「人が憩いを持ちながら、目的もなく歩く中庭的広場・遊歩道」^[1]と説明している。また宮内との対談のなかで「ぼくはね、中庭に対するイメージをコルビュジエに教わったと思うんだ。ヴェルサイユのなかを一緒に歩いているときに、ここがとてもいいという、そのわけを、コルビュジエが一所懸命ぼくに説明してくれた、そのことが頭に非常に残っていてね。つまり、なんとなく囲まれていて自分がこうプロテクトされている感じをもつだろう、それがおれにはいいんだ、って。」と述べており、「エスプラナード」のイメージをコルビュジエから教わったことがわかる。

・近代都市文化への警鐘と「人間性」の回復

前川は弘前市民会館に寄せた「設計者のことば」（1964年4月）の中で、近代都市文化と市民について、次のように述べている。「近代文明はその発生の起源に

於いて既に「半自然」的性格を運命づけられてきました。従って近代都市も亦必然的に「反自然」的である運命をになわされております。そして此の事が人間の運命に重大な影響を与え、人間の幸福を左右する岐路に今日のわれわれを立たせていると言えましょう。」といい、近代都市文化は本来「反自然」であり、したがって「半人間」的であるとしている。またさらに「社会的な動物」といわれる人間には本来孤独をきらって集団生活をいとなみたいという本能的な願望があった」「ただそうした純粋な願いが「金銭」といった様な人間以外のものの恣意にスリかえられていった所に今日の都市化のもつ悲劇がはじまった」と述べ、現代の都市化の問題点を訴えている。「かつてヨーロッパ中世の市民はこうして彼等自身の美しい町を築き上げてきました。現代都市を築きあげるものは民主社会の「市民の心」であって決して「予算」ではありません。」と述べている。「エスプラナード」という言葉を使い始める前の言説であり、前川はこの時期に「人間性」の回復の具体的な手段を模索していたと考えられる。

3. 平面・空間構成にみる「エスプラナード」

3-1. 第一期 「エスプラナード」の形成期

・「建築的プロムナード」の要素を持つ空間（1947-1965）

前川作品において外部空間を活用した作品は「紀伊国屋書店（1947年）」から見られる。吹き抜け空間に中二階の回廊を設計した作品。本棚を利用して一階を屋外的散策路のように構成している。階段を上がると休息の為の場が設置され、この時期「建築的プロムナード」が設計秩序であり、建築空間内に吹き抜け空間を、中二階の回廊、本棚を利用した一階部分の屋外的散策路の構成は「エスプラナード」の特徴的な要素であることが指摘できる。「神奈川県立図書館・音楽堂」

1：日大理工・建築， Undergraduate, CST, Nihon-U. 2：日大理工・建築・教員， Professor, CST, Nihon-U


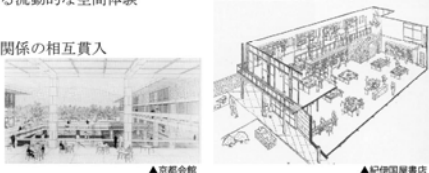

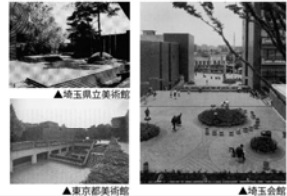


では、ホワイエにこの発展形といえる憩いの空間が実現され、商業的から公共的へと変化を遂げた作品でもある。外部から連続したフラットな空間によって人を引き込み、各所へとアプローチしていることが言える。「京都会館」ではピロティとテラスによって公共性と連続性は、ガラスを使用しない連続性を生み出しおり、あたかも外部のように見せた内部空間であるといえる。一方、「東京文化会館」では公園の敷地を散策路として捉え、建築内で広場の用途と休憩の場を各所へ設けた吹き抜け空間での構成を図っている。

3-2. 第二期「エスプラナード」の概念化

・「エスプラナード」の導入 (1966 - 1975)

「埼玉会館」はオーディトリウムが地下へ埋められ、屋上に「エスプラナード」展開する。建築が埋蔵されることで都市の連続体と位置付け、市民への開放を実現する。「ストラクチュアの明快さよりもまず空間^[2]」を優先した結果、中庭的広場・遊歩道の機能を取り込んだ作品に仕上げたと言える。前川自身が「埼玉会館」で全面的に打込みタイルを使用したのも空間を「憩いの広場」に仕上げるための工夫である。しかし、この広場を介した街路の連結の計画は、複数の広場の連結による独立的な機能の短絡的な接合であり、広場及び周辺建築は身体寸法より遙かに巨大である。この尺度の要因は地下に埋めた建築に倣った結果であり、寧ろ建築物同士の間隙へ埋め込んだことで可能となった屋上広場の配置計画に強引な説得を図ったものと言える。

表1 前川國男の建築作品にみる「エスプラナード」の展開

西暦[和暦]	建築作品	平面構成	特徴
第一期 1947[S22] 1957[S29] 1960[S35] 1961[S36] 1963[S38] 1964[S39]	紀伊国屋書店 神奈川県立美術館 京都会館 東京文化会館 林原美術館 紀伊国屋ビルディング	 ・内部空間を開放している	<ul style="list-style-type: none"> ・内部空間に憩う場が設置され、内部で開放される計画 ・「建築的プロムナード」による流動的な空間体験 ・一階を散策路的な空間へ ・吹き抜け空間を利用した上下関係の相互貫入 ・日光の充分に入るデザイン 
第二期 1966[S41] 1970[S45] 1971[S46] 1974[S49] 1975[S50]	埼玉会館 日本万国博覧会鉄鋼館 埼玉県立美術館 東京海上ビル 東京都美術館	 ・外部空間を開放している	<ul style="list-style-type: none"> ・都市的に外部として開放された広場とその持つ公共性の計画 ・中庭を中心に捉えたボリューム操作・空間配置 ・二つの道(場)を結ぶ通り抜けの空間 ・流動と滞留の場を混在させる平面計画 ・都市における包括された広場の位置付け 
第三期 1976[S51] 1977[S52] 1977[S52] 1979[S54]	弘前市立美術館 ケルン市立東洋美術館 熊本県立美術館 福岡市美術館	 ・空間が相互貫入し連結している	<ul style="list-style-type: none"> ・建築物の内外に問わず、連続した空間構成・計画 ・「内部の外部化」と「外部の内部化」 ・水平的な床・壁・階段の連結と視線 ・身体的尺度の採用とディテール ・敷地全体を建築物化 ・道と道を繋ぐ場からアプローチの手法へ 

3-3. 第三期 「エスプラナード」の有機的接続

・「内部の外部化」、「外部の内部化」(1976 - 1979)

身体尺度に沿った建築空間の創出は晩年に実践される。晩年の「エスプラナード」を利用した作品は全て美術館・博物館に集約される。これらは、「埼玉県立美術館」の「一筆書き」によるプランニングの発展形態の為であり、特徴として前川の図面の「ステージ」に該当する場が、図面にも「エスプラナード」として記載され、場所が分節されている。「ステージ」では持ち得なかった流動性を獲得した設計になる。この流動性の獲得は、「福岡市美術館」で空間的に内部と外部が「エスプラナード」の発展により元々外部であった場が建築内をも貫入し、広場は細かく分節され、屋上庭園をも有した作品となる。徐々に広場の大きさが収縮された設計手法を追求することで大きな一つの広場であった空間が「内部は外部へ」「外部は内部へ」と「エスプラナード」が多様化した。

4. まとめ

前川の実行した「エスプラナード」は師コルビュジェの「建築的プロムナード」を基調とした設計手法であり、空間を水平的に連続させ、滞留の場へと展開していった。結果として時間を放棄し、市民の「人間性」の回復を目的とした前川の理念が反映されていると言える。

5. 参考文献及び補注

[1]「前川國男 現代との対話」, 松隈洋, 六耀社, p.31., 2006年

[2]「一建築家の信条」前川國男, 晶文社, p190, 1981年